

ACOP2010 年度報告書・学生感想レポート

以下の2名の学生は、1回生前期の必修講義において、学生同士でのACOPナビゲーション練習を行っている最中に「2010年度ACOP報告書」を読んでいます。以下の感想はそうした時期に執筆されたものです。なお、一部の個人名などは匿名にかえています。

赤津さくら（1回生）

私が、ACOP報告書からASP学科の1回生として受け取ったのは「失敗を恐れるな」というメッセージです。先生や、研究者の方、先輩方の言葉で埋めつくされたすべてのページが、ACOPを乗り越えた先輩方の勲章であり、同時に私たち後輩への激励であるかのように感じました。

まず、報告書のボリュームに驚きました。ACOPというプロジェクトは、これほどの言葉を尽くして語られるほどのものなのか、と。しかも、先輩方の言葉の一言、一言に経験と実感から来る切実さがこもっているし、自分を見つめて、赤裸々にありのままをさらけ出しています。中途半端なモチベーションでナビを終えた人は、ただの一人もいないように感じましたし、改めて、ACOPは心してとりかからなければならないものであると認識しました。

「週間報告」では、厳しい練習の渦中にある先輩方の苦しみやもがきが伝わってきて、やがてその立場になる身としてとても恐ろしく感じ、自分がナビをすることなどできるのだろうかという不安が募りました。ところが、学生の言葉・感情を追いかけてページを重ねるごとにだんだんと言葉に希望が表れ始め、やがて皆さんが合格へと至ったことで、ナビ合格は非常に高い壁ではあるものの、現実的に乗り越えることができるものなのだということがよく分かりました。私の中でなにか漠然としていた、ナビゲイターとして訓練し、合格するとはどういうことか、というビジョンがクリアになった気がします。

最終レポートでの、「ACOPを経験したことでの変化度」で、最大の10という学生もいれば、4や5の学生もいました。全員の価値観が劇的に変化したというわけではないにしても、変化度9、10をつけた学生が大半を占めたということが印象的でした。アートに対する価値観を育てる時間は、大学入学以前の生活のなかに長くあったはずなのに、入学後のACOPを経験する8か月間でそれほどまでに変化するということが大きな驚きでした。また、私自身も大きく頷いてしまうことでもありました。

価値観の変化という点では、アートとはこういうものだ、と、かつて誰かから教えられ、自分の中に確固たる観念を持っている人の方が振れ幅が大きくなるはずなので、当然といえば当然かもしれません。私自身も、美術研究所で4年間みっちり教え込まれた「作る側からの美術」観念が、時折頭をもたげます。

また、学生の変化は、作品の見方に留まらず、生き方にも及んでいるようです。それには、作品鑑賞でのコミュニケーションやグループワークが大きく影響しているようであり、ものの見え方、考え

方だけでなく、自分の人間性や本性までもが他者にひらかれるプロジェクトだからこそだと思いました。ひとりきりで作品鑑賞をする時は、臭い物に蓋をする、ではありませんが、向き合いたくない自分の心からは目を背けることができます。その結果、とても独りよがりな鑑賞になってしまうかもしれない。それは作品に対してとても勿体ないことです。見ないふりをしていて部分に向き合えることもまた ACOP の魅力なのだと思います。

報告書の記述に戻ると、作品を見る側とナビゲーションをする側は、似ているようでやはり違うと分かります。実際にナビゲイターとして前に立ってみると、それまでの鑑賞者側からナビゲイターを見ていたにもかかわらず、予想できないことが沢山起きるのです。ナビゲーションの要領は、つまるところ実践と失敗からしか学べないと感じているのですが、(練習をしているいま、) 報告書の中に自分と同じ失敗をした先輩を見つけたことで、自分のほかにも同じ問題で悩んだ人がいたのだと大きな励ましになりました。

そして、問題を解決した経緯が、具体的かつ詳細に書かれていたので、非常に参考になりました。例えば、「ナビゲイターがナビゲイター自身の定めた答えに鑑賞者を誘導することは好ましくなく、作品中のあらゆる可能性を受け入れるべき」という趣旨の記述を読んで、自分が行っていた「答えへ誘導するナビ」を反省しました。それえ、次の練習から改めたところ、前回よりも断然鑑賞者とのコミュニケーションが充実したと感じました。今後、練習を重ねるにつれて、今の自分では理解できない言葉や、何気なく通り過ぎてしまった言葉にも共感できるようになり、大きなヒントをもらったり、心の支えになるのだらうと思います。また、クラスメイトのナビゲーションの反省会でも、報告書を参考にすることで、より皆のためになる意見を伝えられるのではと思いました。

ほかにも、做すべきポイントも多く発見しました。例えば、問題点や反省点を挙げる時は、具体的なほどいいということ。問題点を具体的な言葉に表せる人は、闇雲に努力する人よりもナビの上達が早く、よい観賞会を作ることができるということ。また、ナビゲイター自身のキャラクターを活かしてナビをすると、魅力的な観賞会になることが多いということ。そういった、ナビの特殊な技術ではない「普段の心がけ」や「その人自身のモチベーション」といった根本的なものの違いが、明暗を分けるということ、などです。

なぜその方法をとった方がいいのか、はっきりとした理由がまだわかっていない場合であっても、そういったヒントをいつも頭の片隅に意識しておくことで、失敗を未然に防ぐこともできるのだと思います。このことを長期休みの前に知れたことは、私にとって大きな収穫といえます。付け焼刃の技術では到底充実した作品鑑賞などできませんし、ナビについても同じことが言えると思うからです。休暇中にたくさんの作品を鑑賞し、素直な状態で「見る考える話す」力を磨いておくことが、よいナビゲイターになるための最も着実な近道になるのだらうと教えられました。

さいごに、特に印象的だったのは、P118 の「プライドを捨てるプライド」という言葉です。この言葉は、自分が ACOP で発言する時に緊張を抑えるために言い聞かせている「私のちっぽけな恥を捨てて本心をさらけ出してこそ、参加者にとってより意味のある ACOP になるのだから」という言葉に似ており、とても大きな共感を覚えました。そして、その学生が、自らの殻を破って恥を捨てたときに、観賞者としてもナビゲイターとしても成長できたというエピソードが、さらに、自分の本心をさらけ出したい欲求を強くしました。

鑑賞能力が未熟な自分にとって、自分のモノの見え方を鵜呑みにせず、考えを打ち消したり否定

したりしながら様々なものの捉え方を検証する努力が必要なことは確かなのですが、その考えにある意味で甘えて「考え足りないから発言しない」と、自分の引け目を打ち消す言い訳にできてしまったという真実に向き合うことができました。そんなことをしていても結局は、共に鑑賞をする人に、自分の心からのものの見方という「ギフト」を送ることができないし、本心でものを見て、考えて、ありのままの自分を曝け出してそ ACOP の面白さが味わえるはずです。第一、お客さんが観にいらっしやることを思えば、自分のなりふりなど構ってはいられません。

かつて数年がかりの目標であった東京藝大という険しい目標に全身全霊で挑戦し、敗れている自分にとって、ナビゲイターオーディションでふたたび全力で自分の能力の限界に挑戦することは、自分自身へのリベンジでもあります。よい結果を掴み取るために、今の自分はどれだけ頑張れるのか、どれだけ失敗から学べるか、そしてやがて合格へ至ったときに、人間として、表現者としてどれだけ成長できているかが楽しみです。このまたとない好機を心待ちにしている自分がいます。

荒川 莉佳子 (1 回生)

まず、前期の ACOP 練習の中で私は一切成長できなかった。練習一回目のナビゲイションも最後のナビゲイションでも、私はしっかり作品をみることができなかった。報告書を読む以前に、多くの面が欠けていた。今回の感想では、私のナビゲイションの弱点と報告書の言葉を照らし合わせながら、分析していこうと思う。

ナビゲイターとして、まとめをしっかりとしなければならぬとか、鑑賞者を見なければならぬとか、いろいろ強迫観念を自分で作ってしまったように思う。「勝手にルールを作って、枠にはめて、苦しい苦しいって言ってたのは自分だった。」(P.52)と書いている人の気持ちが今ならすぐ分かる。私の場合、そうすることで理想の私を演じようとしていた。自分が完ぺきなナビゲイションをして、鑑賞者に拍手してもらえる場面の妄想にとらわれていたのだ。さらにひどかったのが、そんな妄想をしているわりにはそれを実行させるための努力を全くしていなかったことだ。報告書を読んでいて、ヒヤッとした言葉がある。

「その人個人のその人もきがついていない部分が出る。嫌でも出る。面白いくらいでる。」(P.46)

学生同士と一緒に練習をしたある時に、このことを本当に痛感した。そのときの反省会で私があまりにも口癖が多すぎるという指摘をされ、どうしてそこが気になったか皆で考えた。そのときに出了結論が「荒川は意見を聞いたふりをするとときに“なんか”と“結構”をものすごく使うように思う。」というもので、その後でそれを気にしてみると、無意識に日常会話でもその通りになっていたのでびっくりした。

さらにびっくりしたのが、ナビゲイターにいきなり当てられて慌てて答える子や、意見がまとまらないまま発言している子も“なんか”をとにかく使うということだ。これ以外にも、報告書を読む限り、自分が気づいてないだけで、会話の中には自分の弱点を表す口癖や口調が大量に出ているようである。

ちなみに、あるメンバーが3回発言したときに、その中で“なんか”と言った回数をかぞえてみると40回以上だった。会話の半分が“なんか”で埋め尽くされていることは確かだった。鑑賞会本番でお

客さんの前に出るときは、20分というごく短い時間の中でナビをしなければならない。だから、これは必ず見直すべき点だと思う。

また、「『つまり相手はなにが言いたいのか』を常に念頭において聞くことが今、必要な『聞く』ということだと思いました」(P.47)という文章が心につき刺さった。各班に分かれて練習していたときに、ナビゲイターが「この流れにもっていこう」と考えて形式的なナビゲーションになると、(ナビゲイターは)鑑賞者の意見が聞けなくなるし、鑑賞者の意見に流されるのもいけないし、結局どっちつかずの鑑賞になったことがある。

その練習の後、私のナビゲーションの際に伊達先生に言われたのだが、私はいつのナビゲーションでもディスクリプション(作品描写、作品に描かれている要素を言語化し、把握すること)がまったくできていなかった。相手の意見を知ったかぶりしていたと言われても否定できないぐらい、鑑賞者の意見を掘り下げず、自分がナビをまとめることに重きを置いていた。いま考えれば、それはもはやACOPではない。私一人で作品鑑賞をしているのとなんら変わりのないものだ。いや、ナビである私自身の意見もろくに出さなかったのもっとひどかったかもしれない。

以前の作品選びのときには、「相手を思いやる、気遣う気持ち、サプライズ精神をもったナビをする!! 作品も相手も自分も存在する空間をつくりあげてみせる!!」と豪語したが、ナビをすればするほど、いままで放っていた何事にも曖昧に向き合ってしまう性格や利己心が出てきて、私はぼろぼろと出てくる自分の欠点を誤魔化すことばかりに必死で、作品も鑑賞者もみていなかった。(しかし、みんなからの指摘を聞くかぎりバレバレだったらしいが...)

そういえば、おなじことが高校の演習授業で作品鑑賞をした際も起こっていた。あのとき泣いて、落ち込んで必死になって担当の先生に渡したレポートはなんだったのだろう。その先生に自分の弱さをさらけ出した、あのときの私はどこに行ってしまったのか。たぶん、必死になったという行為に自己満足して終わっていたのかもしれない。

報告書の気になった個所に線を引いていくと、その個所には必ず『壁』の一文字が入っていることに後から気付いた。私も心のどこかで自分の壁に向き合わなければいけないと思っているのだろう。線をひいた個所で「壁は壊すわけでも、乗り越えるわけでもなくて、私の場合ずっと一緒にあるんだと思った。一緒にあるからこそ、少し距離をとって意識しなければならない」(P.55)という言葉が一番心にきた。私の場合は壁があることは知っていた。でも向き合おうとしてこなかった。隠したらどうかなると思っていた。でも、報告書を読む限り、今後のACOPでは隠せないだろうと思う。隠しても、みんなに無理やり引き出されるか、引き出さなくてはやっていけない状況に陥るのだと思う。後期は腹をくくらなければ...

ナビゲーションをした作品に関していうと、いつも美術館や授業で短時間のうちに作品を一生懸命みているのに、この3週間という長い時間のあいだでは、まったく作品にかじりつけなかった。

(作品鑑賞よりも)ナビゲイターとして成長しなければいけないとばかり思っていたのだ。しかし、その前に私は選んだ作品に対し、優れた鑑賞者でなければいけなかった。私自身が作品をしっかり理解し、その魅力をもっとたくさんの人に知ってもらいたい、という意欲がなければいけなかった。作品をきちんとみていないナビゲイターで、鑑賞者はきっと不安だっただろう。

練習がはじまる前に報告書は全部目を通していた。しかし、本で読むのと実際やってみるのとでは違った。今回は振り返っても悔しい思いしかない。

絵画は白い布とそこに作られた絵の具のシミで作られている。そうやってしまえば、絵画はケチャップのシミがついた服と一緒にただの“モノ”だ。しかし、私たちは服のシミがただの“シミ”に見えても、絵画には絵の具のシミではなく、様々な物事や、あるいは“世界”をみる。つまり、モノ以上の世界をそこにみる、あるいは想像するのだ。そのとき、モノ以上の価値“アート”が生まれるのだと私は思う。その『見る→想像する→モノ以上の世界をみる』という行為がなければアート（芸術）は存在しない。ASP 学科の私たちは、ACOP をする中で鑑賞者となり、ナビゲイターとなり、たくさんの作品をじっくりとみる中で、体験的に『見る→想像する→モノ以上の世界をみる』という行為は一体何かということを分析的に学び、アートを学ぶ意味・アートの価値を考えることを身につけ、アートを社会に発信する人間になるように訓練されているのだと思う。この ACOP 報告書には、鑑賞者として、ナビゲイターとして鍛えられていく過程の、先輩方の生々しい声が綴られていた。

さいごに、報告書の「今週の名言」（P.45～）を読んでいて、先輩たちの名言がナビの仕方の改善から自分の改善へと話が変わっていったのは、福先生の「鑑賞レベルの向上」にもかなりあてはまると思う。私は中学生の頃から美術館や展覧会に行っていたので、この7年間でアートには人一倍触れあってきたつもりだったけれど、作品の表面に疑問を持つ程度で終わっていた。過去に ACOP に鑑賞者として参加したときも、疑問をもったところに理由や解釈をつけていたけれど、それは私の力ではなくて、先輩たちナビゲイターの力量のおかげでそうできたのだと、今は思う。（注：この学生は高校生の時に ACOP 鑑賞会に鑑賞者ボランティアとして参加している）

それに比べ、1年間 ACOP のカリキュラムを経験した先輩たちは、私の7年間の鑑賞をはるかに上回る言葉を綴っていた。私はずっとアートに関わってきたからアートを誰よりも理解したつもりになっていたけれど、そんなことはなかった。たぶん私は7年間で先輩たちの30パーセントも作品をみていないのだと思う。つまり、自己満足で終わっていたのだ。

アートの世界はまだまだ広い。報告書を読む限り、自己満足で終わってはもったいないくらい多くの魅力がまだまだあるのだと思う。自分の『芸術バカ』な特性を生かし、後期は前期以上にアートについて深めていこうと思う。

ACOP 報告書のお求めはこちら → <http://www.acop.jp/shop/index.html>